



RISING

mini

Vol.03

一次創作、二次創作をひとまとめにした増刊誌 第三号登場!!

Creat.inc



目次

メカクシティアクターズ……………	3
第四話 コノハの世界事情……………	3
幕間 一……………	9
第五話 デッドアンドシーク……………	11
お知らせ……………	22
ロジカリスト（白）……………	23
2日目B 事情聴取……………	23
【新連載】ネクストワールド 名のなき世界3……………	37
【集中連載】俺の同級生が魔王……………	40
プロローグ……………	40
第一章 前編……………	42
【新連載】ここから、脱出してください。 エーテル・ラビリンス編……………	47
ポケモン＋ノブナガの野望 ゲムムVSダイチ編……………	57
【特別読み切り】オツキミリサイタル【二次創作】……………	61
次号予告……………	69
あとがき……………	70

メカクシティアクターズ

第四話 コノハの世界事情

「どうだ……。生き返った気持ちは？」

気づくと少年は謎の液体の中で目を覚ました。正直、夢だと思っていた。

「おい、どうだと聞いているんだ。君は人類の歴史に残るんだぞ？」

白衣の着た人間に言われ、自分の存在をおもいだす。

彼の名前は——コノハという。

どうやら、彼は終わった命を蒸し返す機械らしいのだ。

十一

彼は昔の記憶を揺り起こす。

確か、少女が泣き叫び、「また会いたい」と呟いて——そんな感じだったのをおぼえている。

けど、記憶は曖昧で、それがほんとかどうかどうかもコノハには解らなかった。

コノハはそんなことを思いながら、塀の向こうの街を眺めていた。

見た目世界の技術を濃縮したようにも視えるその街はただのハリボテに過ぎなかった。「……『終末実験』ねえ……」

コノハは先程科学者から聞かされた実験概要なるものについて思い出していた。要するにこういうことだ。

この世界のある場所にスイッチがある。そのスイッチが起動さえすれば終末実験のはじまり、つてわけだ。

でも、それが誰によるものかはさっぱりで、早く終わって誰かと話をしたいなあとか思ったりしている。

ところで——『終末実験』は昨日時点で予想通りグダグダすぎて、もう8月も半分を過ぎようとしていた。

「もう諦めたほうがいいんじゃないかなあ」

コノハはそんなことを思いながら街を歩いていった。

ふと、信号機の方を見ると、

少年が、期待はずれの車線の先で飛び散った。

泣き叫ぶ少女を、コノハは特に思うこともなく眺めていた。

「ああ、またか」

そう思つて、コノハは空を見上げた。

——秒針は進み出すのをやめて、世界もろとも眩み出そうとする。
この夢は——まだ、終わらない。

十一

「……なんだ、大変だな」

ハリボテの街の外で、コノハは眠そうに欠伸を一つした。

外はなんだか騒がしくて、警報がさつきから鳴りまくっている。警備はどうなんだろう。警備は。

「……まあ、まだ時間はあるからいいか」

そう言つてコノハはまた回想へ入った——。

彼の頭はただ、考えていた。

ひとつ——この世界に自分がいる意味。

ふたつ——この世界で起きた夢みたいな出来事。

みつ——そして、現実に行き起きている事態。

その全てを絡ませ、結論のように呟いた。

「この世界はどうやら少しヤバイらしい」

【これは彼と彼女のお話】

だが、それを伝えようとも作られてしまった心ではもう言葉も届くことはないのだから。

枯れる太陽の音が響き、蒸せる炎天下の目が大地を見つめていた。

夏バテした世間にはじき出された様な蝉の声がもう鳴り響き始めたとして、この身体では救うこともできない。

「……あの科学者、一体何がしたいんだ……。透けてる身体だと？ 死んだからだを蘇らせてくれたのは嬉しいけれどこれじゃ生き殺しじゃないか……」

こんな身体じゃ、彼と彼女を助けるために伸ばした手も届くわけはなかった。

期待はずれの視界の先で、少年がまた飛び散った。踏み潰された。

秒針はふざけて立ち止まって、踏み潰された未来を反対車線で見っていた。

機械仕掛けの世界を抜けて、木の葉の落ちる未来——9月の風景へと、君の目で見なくちゃいけないのか？

それを知ってか知らずか「ざまあみろ」と言おうとしているのか、少年は笑っていた。

十一

「失礼。少しお話を伺いたいのだが？」

コノハが物思いにふけていると、ひとりの男が声をかけてきた。

「……誰だ」

「ああ。すまなかった。俺はシンタローというのだが……メカクシ団というのは……存知かな？」

「いいや」

「そうか」

シントローとコノハの会話を、ヒビヤは後で眺めていた。

「……ところで僕をどうするつもりだい？ どうせ実験体さ。殺すなりなんなり好きにするがいい」

「ほんとならそうしてやりたいがそうもいかなくてね」

シントローは少し怒っているようにも見えた。

「お前をリーダーの元へ連れてくるように言われているのさ。コノハ」

シントローはそう言って手を差し伸べた。

コノハはそれを見て、握り返した。

メカクシ団アジト。

「キド、ちゃんと連れてきたぞ」

「ご苦労だったな。感謝する」

「なに、お前の命令だったらなんでもやってやるさ」

シntaxローはキドの言葉に、そう答えて部屋から出ていった。

残されたのは——キドとコノハ。

キドはコノハの方を眺め見て、ぽつり呟いた。

「——お前が『命を蒸し返す機械』とやらか」

「もしそうだったらなにか？」

「——いや、なに。どうせお前に私怨を叩きつけたとしても何の措置にもならないからな」

「……ああ、そういうこと」

コノハは何かを把握したらしく、少しだけ笑った。

「開発者の彼女を探しているんだね。……恐らくあのシntaxローとやらも」

その言葉にキドの顔が少しだけ歪んだ。

「……何処に居る？」

「そんなことを言われても。僕はあくまでも機械としての立場ですよ？　そんなやつが最高機密に近い存在の事を知ってるとは思えないんだけどね」

「そうか。……わかった」

そう言つてキドは小さく頷き、窓を見つめた。

「僕をどうするつもりだい？」

コノハは小さく笑つて、首を傾げた。

「——そうだな。ならばまずは……私達の計画に参加してもらおうか。彼女を救う、R計画に」

第五話 デッドアンドシーク

メカクシ団員は、直ぐ様会議室に集められた。シンタローに、ヒビヤ、マリーに、あのときはいなかった団員もちらほらという。ヒビヤはどうやらニジオタコムニショーヒキニートの存在を見くびっていた。確かにそうだ。こんなアウトドア派のヒキニートがいるはずがない。しかもコムニケーション能力ももしかしたら人並み以上はありそうな彼等が実はニジオタコムニショーヒキニート？ 世界は何だか概念の付け方を間違えたのではないかと思ってしまう。

「さて、メカクシ団員の諸君、会議を始めよう。内容は簡単だ。“カゲロウ作戦”を執行する」

キドのその言葉を聞き、会議室はざわめきを隠せなかった。それほど重要な作戦であることが、団員全員が理解しているというのがあるのだろう。

「では、概要などを説明していく。まずは再び潜入、今度は箱庭内へと入っていく」その言葉を聞き、ヒビヤは驚いた。何故なら、前回の作戦でも、何故かヒビヤにだけ箱庭内には入るなと灸を据えられていたからである。

「ヒビヤは恐らく箱庭へ入るなとあのときは命令した。だが、今回はヒビヤも入っている。これは重大な作戦だ。失敗は許されない。いいな？」

キドの言葉に、ヒビヤは頷く。

「よろしい。では——『メカクシ完了』」

その言葉と共に、キドやヒビヤ含むメカクシ団団員はフードを深くかぶった。

そして。

「……ここが、箱庭……」

キドたちは再びあの高い壁へとやってきていた。

「ああ。これがそうだ。……さてと、入口を探さねば……」

「既に見つけてあるが？」

「さすがはシンタローだな。よし、では入っていこう」

「礼もなしか」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

そんなやりとりを交わして、メカクシ団は箱庭の中へと入っていった。

『箱庭』

実質はヒビヤはそれしか知らない。それしか聞かされていない、といったほうが正しいのかもしれない。キドからの説明もなかったし、シンタローやコノハ、マリーも教え

てくれなかったのでヒビヤは独り仲間はずれの感じになっていた。

「……ごめんね。何も分からなくて」

そう慰めるようにつぶやくのはマリーだ。彼女はメデューサらしく、目を合わせると石になってしまうのだという。だが、実際は『彼女にその意志がなければ』石にさせることもないので、皆分け隔てなく仲間としている。

「いや、別に君が謝ることじゃないよ」

「そうだけど……、あなただけ解らないってのもちよつと……」

「マリー、あまりしゃべるなよ」

「それってまさかダジャレだったりします?」

「……?」

キドはまったく解らないようだったがシンタローが後で笑っていたので、シンタローには解るものだった。どうやらこの団長、天然らしい。

「……とりあえず、箱庭に潜入した」キドはフードをさらに深くかぶった。「見たまえ。ここが箱庭だよ」

キドの言葉に従い、ヒビヤはそこを見た。

——そこは見覚えのある信号機だった。

ぞわり。ヒビヤの背中に冷や汗が走る。

「……まさか、」

「漸く解つてくれたようで嬉しいよ。ここは……箱庭。“君が前住んでいた世界”さ」

「……ここが、箱庭……、僕がいた世界……」

「思い出したかね？」

キドはヒビヤに問いかける。ヒビヤはゆつくりと頷く。

「……さて、実はだな。君には少し難しい話をしておこうと思う」

「なんでしよう」

キドが言ったのはこんなことだった。

十一

昔々、世界に見捨てられたメデューサがいました。

彼女は世界に捨てられ、世界の片隅に生きていましたが、あるとき一人の男性と出会いました。

彼らは結ばれて——一人の女の子が生まれました。

幸せな日々でした。

しかしながら、そんな幸せな日々は長くは続きませんでした。

そして、彼女は思ったのです。

「だったら、終わらないセカイをつくらう」

と。

そして、終わらないセカイが完成した。

しかしながら、それは影響を受けてしまうモノもあった。

『カゲロウデイズ』もその一つだった。

終わらないセカイ、カゲロウデイズ。

そして、一部の少年少女は——あるトラウマを持ってすごし、そのときに能力を手に入れた。

それは、『赤い目』だった。

そして、その影響を作った世界こそが——カゲロウデイズ、ここであつた。

十一

キドの話は、ヒビヤには信じがたいものだった。

箱庭？ 世界？ 作り替える？

つまり、僕はそのメデューサのために生きていたのか？

作られた命だったのか？

ヒビヤは頭の中で考えた。けれども、結論などそう簡単に出るわけもなかった。

「……さて、行くぞ」

キドは走る体勢を取った。

「……どこへ？」

「さつきも言っただろう。繰り返しを行うことで調査する世界、とな。その条件はある命の終了——つまり、ヒビヤくん、君が救いたい命の終了が繰り返しの条件になっているんだよ」

彼女を救うために、ヒビヤは再びあの場所へと立った。

とはいっても、どうすればいいのか、ヒビヤには解らない。

ヒビヤにはどうすれば、彼女を救えるのかは解らない。

でも、彼には——思いがあった。

彼女を——救いたい。そして——伝えたい。

ヒビヤは、彼女が好きだった。

本当ならば、あの八月十五日でその思いを伝えるつもりだったのだ。

ただ、なんどもこれは繰り返される。いつになっても、いつになっても。

——これを、どうすれば彼女を救えるんだ？

ヒビヤは、ただ考えることしか出来なかった。

「……仕方ない。強引にでも連れ去るしかないだろう」

キドの言葉は一瞬だった。

刹那、キドの合図とともに向こうの公園で今話しているはずの彼女がここに連れてこ

られた。

「……え？」

あまりのことで、ヒビヤにはすべてが追いつかなかった。

だけど、これだけは解った。

彼女が——ここにいる。

今まで、助けることのできなかつた彼女が自分の目の前に、手の届くところにいるということだ。

もう、あの繰り返しもない。

繰り返しもないのなら、九月へと行くこともできる。

「……よかつたな、ヒビヤ」

気付くと、コノハがヒビヤの目の前へと来ていた。

「……？」

「僕は命を蒸し返す機械、らしい。そして、今まで君たちの存在を知っていた。だけど……救うことはできなかった。そして今……君達は君たちの手で運命を解き放った……」

「そんな、大層なことはしていないですよ。メカクシ団のみなさんのおかげです」

「私はただ目的のために行動している。それで利用したまでだ」

「またまた、そんなこと言つて。ほんとはさみしいんでしょ？」

「シインタロー、ちよつと黙れ!!」

こほん。

「……ひとまずはよかったな。助けることができてる」

キドは咳を一つして言った。

「だが、これにより少し問題も発生するだろうな。プログラムのコードを、それも重要部分を削ってしまったんだ。バグも発生するだろうが、所詮は箱庭、おそらく繰り返しが繰り返されていくだろうな」

「……それって、どういうことですか」

「どうしたもこうしたも簡単だ。今まで君らの繰り返しによってこの箱庭は安定していたんだ。それが消えたらどうなる？ 即ちバグが起きたまま、プログラムを実行することになる。それが小さければいいだろうが、今回の場合はこの箱庭の根幹を揺るがすものだ。例えば、の話だがゲームのプログラムでソフトをインストールして認知するプログラムが動かなかったらどうなる？ それはゲームとしては機能を失い、ゲームではなくなる。それがどういうことを意味するか、なんとなくでも君にも解るだろう？」

「……つまり、ここが消えてしまう……と？」

「それもありえるな。意味を失った実験施設は無意味だろう。……それがどうかしたか？」
「だって……そんなの辛いじゃないですか!! 僕らだけが助かって、ほかの人間が死んじゃうなんて! そんなの……」

「なるほどな」

キドは笑って言う。

「じゃあどうする？　メカクシ団にいれば、もしかしたらその方法も見つかることができるかももしれんぞ？」

「……解りました。行きます。メカクシ団へ。今度は、自分の意志で」

「解った。では、歓迎しよう。メカクシ団へ！」

キドはそう言って微笑んだ。

夏の陽射しは少し和らいで、季節外れの北風が吹いていた。

ヒビヤ編

終わり

『カゲロウデイズ』が終わったか」

研究室で一人の人間がパソコンの画面を眺めて言った。
カゲロウデイズが終わった。

しかし、『彼女』はまだ戻ってはいなかった。

「きつと君はまだ、あの夏の温度に縛られているんだ」

そうだ、まだ俺は正常だ。

まだあの夏の温度に縛られている——だったら。

「黒羽、お前の出番だぞ」

そう言うのと、人間の後ろにいた男が笑った。

男はコノハとは違い——黒かった。

その人間こそが黒羽なのだろう。

黒羽はそれを聴いて、答えた。

「……コノハも逃げ出して、散々だな。“先生”？」

「ああ、ほんとうだよまったく」

そして、『先生』はパソコンのエンターキーを押した。

パソコンの画面には、ゴシックの文字が浮かび上がった。

『カゲロウデイズ』リブートプログラムを起動しますか？
Yes or No?

そして、先生は『Y』のキーを押した。

お知らせ

『メカクシティアクターズ』は八月十七日発行予定の第九号より再開いたします。

なお、物語は、第六話ロスタイムメモリーⅠ、第七話夕景イエスタデイⅠを予定しております。しばしお待ちください。

ロジカリスト（白）

2日目B 事情聴取

仕方ないから、本を読もうと思う。

ダニエル・キイス著『アルジャーノンに花束を』だ。僕は読書をあまり好まないが、エヴァンからこれを勧められてそのままに読んでいった。とても面白いし、興味深い。

精神遅滞者であるチャーリーは、仕事の傍らに通っていた精神遅滞者専用のクラスで博士に脳手術をうけないかと勧められる……そこまで読んだところだった。

「ふうん。アルジャーノンに花束を、ね。君みたいな人間がそういうものを読むとは」「そういうもの、とはどういう意味ですかね」

「だって、君みたいに頭が良くない風に見える人間が読書とは到底思えない」
戸塚さん、って言ったかな。

彼女はもう少し裏表つてもんを学ぶべきだと思う。

「読書だっていいものだよ。ココロと身体を落ち着かせるもんだ。ツマラナイ時はそれを読んでいけば大抵は暇を潰せるし」

「……ふーん、読書って面白いかね？ 私は全然本なんて読まないからさー」

「それは人それぞれだと思えるよ」

そんなもんかね、と首を傾げて戸塚さんは自分の席へと戻っていった。まったく、人の趣味くらい手を出せないものかな。別に趣味なんだからいいじゃないかって思うけど。

「——すいません、皆さん」

一二三さんが戻ってきたのは僕らの会話からすぐのことだった。息を切らして——恐らく走ったのだろう——彼女一人で戻ってきた。

「……あれ？ 一二三様、土生様は……？」

執事さんが訊ねる。それに一二三さんは無言で首を横に振った。

そして、言う。

「……月日が死んだ」

「は、土生さんが……？」

はじめに言ったのは僕だった。

しかし、一二三さんは何も答えない。

「……とりあえず、皆来てくれ」

一二三さんの意見にしたがって、僕たちは土生さんの部屋へ向かった。

土生さんの部屋に向かうには、そう時間はかからなかった。

とりあえず、中を見たほうがいいだろう。

そのために身体を強引にそちらの方へと向ける。

「あんまり見ないほうがいい」

そう言つて一二三さんは唇を舐めて言った。部屋が乾燥しているからかな。

「——とりあえず、アリバイ調査と洒落込もうか」

「ケイリー、何を言い出すんだ？」

「エヴァン、だつて考えてみなよ。今、人が死んだ。つまり、この中に犯人が居るってことなんだよ」

ケイリーの言うことは至極正しいものだった。しかし、今いる人間がそれを言つてくれるか？ と考えると答えはきつとノーだろう。一般人ならば、言うに違いないが、今は鬼才や天才と呼ばれる人間ばかりが集っている。

現に今いるメンバーは表情だけで嫌悪感が見られるくらいだ。

「……まあ、仕方ないだろう。これは殺人事件だ」

はじめに言つたのは司さんだった。

「分かつてくれて、助かる」

「……にしても、まず私にアリバイは存在しませんね。だつてあのあと食事が終わり執事の小河内さんと一緒に片付けをしたあと給仕の縣さんと次の日の食事について会議をしていましたから」

「一夜中ですか？」

「いえ、その日の会議で今晚はビーフシチューにしようとしまして。一日中煮込んでいたわけです。証拠は……そうですね、今火を止めて厨房にある鍋くらいでしょうか」

となると司さんにアリバイはあるだろう。

後で縣さんと小河内さんにも聞いておく必要があるけど。

「とりあえず、みんないろいろあるだろうけれど、食事の部屋へ。アリバイとか聞きたいこともあるし」

ケイリーの言葉に、僕は従うこととした。

ほかの人間もおおかたそれに従うようだった。

大広間に戻っても誰も話すことはなかった。なんとというか、皆自分の世界に入って逃げ込んでいる。そこに関しては人間らしいんだけどね。

「――私のアリバイについて話そうか」

スーツを着た、壮年の男性が言った。

誰だったっけか。僕はじっとその人間を見つめる。

「……ああ、一応自己紹介をしておこうか。私は鈴生九地という。一応警視庁の警視正だ」

鈴生さんはそう言って鼻を鳴らす。顔からして三十代だろう。ノンキャリアの警察官は五十代になればなんとか警視正に行けるレベルというのを聞いたことがあるから、つまりこの人も何処かの大学を卒業したに違いない。それも、日本ではなく世界で言うところの有名大学に。

「私はスタンフォード大学で遺伝子工学を専攻しておりました。……まあ、それは今関

係ないでしょう。ひとまず、私のアリバイだが、私は昨日ずっとこちらの古川さんと飲んでましたよ。同じお酒が好きということでお酒の話で盛り上がりましてね。持ち込んだお酒とつまみを司さんに作っていただいて、それでね」

「……司さん、それは？」

「ええ、本当です。確かに適当にチーズの盛り合わせなどを作ったと思います。えーと……たしか午前二時くらいに」

「その時間に起きていたと？」

「だから言ったでしょう。私は今日の夜御飯の準備をしていたと」

確かにそのとおりだ。即ち、それにより鈴生さんのアリバイも完璧だ。

さて、次は……。

「次は私になりそうですね。——私は古川エレンと言います。一応、情報工学に秀でてはいます。ITストラテジストの資格を所持しています」

「ITストラテジスト？」

「高度IT人材として確立した専門分野をもち、企業の経営戦略に基づいて、ビジネスモデルや企業活動における特定のプロセスについて情報技術を活用して改革・高度化・最適化するための基本戦略を策定・提案・推進する者。また、組み込みシステムの企画及び開発を統括し新たな価値を実現するための基本戦略を策定・提案・推進する者ってやつだね」

さらさらとケイリーが言ってしまった。よく解らないんだけどつまりどういうことかな。

「……つまりは、本当に必要なシステムを分析するっていうの」

「簡単に言いすぎだろ」

「エヴァン、きみが簡単に言えって」

「僕は心の中で思ったただけなんだけどね」

ひとまずこのままじゃ、進まない。

まだ、半分も終わってないんだから。

つまりは古川さんのアリバイもあるわけだ。

お互いがお互いを潰すことは、まあ有り得ないだろう。

「……次は私か。一応自己紹介だ。私は戸塚めぐみ。昨日は……そうだな、直ぐに寝たよ。彼らに会ってね」

そう言っただけの方を指さす。

確かに、あの時出会った。時間は午後十時くらいだったと思う。犯行時間が何時かは知らないが、それも十分なアリバイとなる。

……そうだ。

「そうだ、それよりも殺された時間って何時だか解らないんですか？ ……ほら、あの死亡推定時刻は」

「それなら私が既に確認した」

それを言ったのは一二三さんだった。

「私はいくらでも医者でね。恐らく死後三時間程は経っているものだと思うのだが……」

うん？ 言葉を濁したのはなんでだろう。

「どうして、そこで言葉を濁すんだ？」

言ったのは、ケイリーだった。僕もそれを言いたかったけれど、恐らく僕だったらちやんと答えてくれないような気もする。

「……血がなかったんだ」

「は？」

その言葉に全員の目がまさに点となった。

つまり……どうということなんだ？

「血が完全に抜き取られていた。完全に。完全に血が抜き取られた人間を君達は見たことがあるか？ ……すごいぞ、肌が白いというレベルではない。透明なんだよ。もうまるで透けているんだ。肌が白いとは、骨の色の意味かとも思っていたが、否！ そうですね。なかったんだ」

「ええと、つまり、吸血鬼がこの中にいると？」

「冗談じゃない！」

僕が言った言葉に鼻を鳴らしたのは鈴生さんだった。

確かに冗談を言ってるように見えるかもしれない。

けれど、これは冗談じゃないというのは誰にだって分かってはいるはずなのに。

「吸血鬼？ そんなファンタジーのようなモノが居てたまるか！」

「いいや、吸血鬼はいるよ」

一二三さんに助け舟を出したのはケイリーだった。ケイリーは自分の持ってきたノートパソコンに何かを入力していた。

ケイリーの持つパソコンはまさにエンサイクロペディアである。僕はそれを『エレクトロペディア』って読んでいる。まさに電子の百科事典だ。だったら電子辞書じゃないかって話だけど、電子辞書よりははるかにマイナーな単語も入ってるし、詳しく載っている。いったいどこから集めたんだ、っていうくらいに。

「吸血鬼はよく燕尾服を着ているとかシルクハットをかぶっているとか、赤ワインを血のイメージとしていたりとかあるけど、今の吸血鬼はそんなイメージを覆しちゃう程のものなんだよ。エヴァン、それってなんだと思う？」

「それを僕に聞くのか」

「そうだよ。いいから、さ。なんだと思う？」

こう言われてはもう止まらないので、言わなくてはならない。答えなくてはならない。

「えーと……昼でも活動できる、とか？」

「びんぼーん。大正解」

ケイリーは微笑んで、パソコンの画面をスクロールさせていく。

「ただしいろいろ限界はあるけどね。色んなギミックを用いた結果がそれだから、随分とめんどくさいものには変わりないよ」

「……さつきから何をペラペラと。要は、いるのか、いないのか」
「居るよ」

鈴生さんの言葉にあつという間に答えてしまう。それにはリアクションが出来ないくらいスピードで、だ。僕は慣れているからいいかもしれないけれど、こういう反応って普通ダメだよなあ。

「……この中に吸血鬼が居る、つていうのか？」

「そう。えーと……執事の。だれだっけ？」

「小河内です」

「そうそう、小河内さん。この屋敷に人はどれくらいいる？」

「えーと、そうですね」

小河内さんはすこし右上を見て、言った。

「確か……亡くなった土生様を含めて十八人だったと思います。付き添いの方も含めて、の話ですよ」

「解りました。ということは今ここに十七人居ないとおかしいわけですね」
数える。

確かに、十七人居る。嘘は付いていないようだ。

「……本当だね？」

「私は嘘をついたことはありません」

小河内さんがそう言うのと、そうかい、と言つてまたパソコンをスクロールし始める。

「……ケイリー、話のオチがついてないよ」

「え？ ……ああ、そうか。話を戻すね。つまりここにいる十七人の内の誰かが……血を欲する吸血鬼な訳なんだ。さつきも言ったけどいろいろと制約があつてね。例えば『夜』をイメージした物を常に身に付けていないと行けない、とかね」

夜。

どんなものをイメージ出来るだろうか。

例えば、星や月。夜になると空に輝く。

例えば、黒。色的な意味ではあるが、これもイメージとしては正しいのではないか。

「つまり、そういうことなんだよ。……この中に吸血鬼は必ず居る。そして、土生さんを殺した犯人も、ね」

「……吸血鬼が、この中にいる？」

僕はケイリーが何を言っているのかさっぱり解らなかつた。が、そもそもケイリーは嘘をついたことも、偽りの情報も言うことはない。つまり、彼女の情報は今まで全て正しかつた。嘘をついたことは一度たりとも、そう、一度たりとも見たことがない。

だからこそ、この事実も正しいのだろう。結局は確実な不確定要素が一つ確定しただけにすぎないのだけだ。

「……ええと、ケイリー、でいいのかな？」

エレンさんが手を挙げて声をかけた。丁寧な女性だ。その言葉にケイリーは頷く。

「私の憶えが正しければ、吸血鬼とは血を吸うほかでもなく、赤ワインなど、血に見立てたものでも問題はなかったと言える。別にリスクを負ってまで、血を抜き取るとは考えられないんだが」

「あくまでも、の話だ。仮説を立てるのが推理小説の定説だ」

「くだらん！」

ケイリーの言葉に鈴生さんは声を荒らげた。

「これは推理小説ナドではない。マガイナイ殺人事件なんだぞ!!」

なんだか荒れてしまった。ケイリーと鈴生さんが口喧嘩に発展（尤も、見た人間からすれば鈴生さんが一方的に攻撃しているだけに過ぎないのだが）しそうになって。

「いい加減にしろ」

机を叩く音が響いた。

それが直ぐに戸塚さんが発した音だと言うことに僕は気づいた。

「……今、そんなものを論じている場合ではないのは明らかだろう。今は、彼女を殺めた人物をさがすべきだ」

「——そう言っている君こそどうなのかね？　アリバイが殆どない。つまりは……犯人に一番近い人間だと思えるのだがね？」

皆が、疑っている。

この状況、どう打開すればいいのだろう。ケイリーはどうでもいいのか、パソコンに何かを入力している。英語だらけで、どことなく文面がデタラメに思えてしまうものだった。

「——ん」

ケイリーが行動を停止した。どうしたのかな、とデスクトップを覗き見たらメールが来ているようだった。

「……なんだ、これは」

どうやら、同じ文面のメールが全員に送られているようだった。

僕は関係ない人間だからか、メールは来っていない。

「——拝啓、親愛なる来訪者達へ」

ケイリーが唐突にメールの内容を告げた。

その内容とは、こんなものだった。

拝啓、親愛なる来訪者達へ。

君達は突然のことで驚いたことだろう。これは、ゲームではないことを理解していた

だけただろうか？

土生月日氏の死亡は悲しいことだが、それについて語ることもない。彼女は運が悪かった、ただそれだけの事だったのだ。

「——冗談じゃない、人が死んだのは『運が悪い』だ？ そんな事よく言えるな……!!」
「まだ文面に続きはありますよ、鈴生さん」

そう、まだ半分しか話は読み解かれていない。
まだ、続きがあるのだ。

——これを見て、君達は漸くこの物語を理解してくれただろう。

これは——『探偵犯人ゲーム』のファーストステージに過ぎない。君達にもルールは理解出来ているだろうが、犯人は探偵に犯人と知られるまでに犯人を殺せばよい。探偵は自らが死ぬ前に犯人を見つけなければならない。これは——ゲームではあるが、これでの敗北は即ち現実での死を意味している。

さあ、最高のショウの始まりだ。

だ、そうだ。と。ケイリーが締めた。オーナーはこれを楽しんでいるということさ。
少なくとも普通の感覚ではあるまい。きっとオーナーも『鬼才』なのだ。

いや、果たしてこれは、鬼才と言えるのか――。

「……………ふざけている。鬼才だ？ そんなこと言う貴様オーナーこそ、“奇才”ではないか
……………!!」

それを言ったのはエレンさん。さつきと比べて怒りの色が顔からうかがえる。

つまり。

つまりだ。

あの文面から言えることが一つ、ある。

——オーナーは人の命をスゴロクのコマのように存外に扱える人間である。
そのことを。

ネクストワールド 名のなき世界3

第一章 第二話

どこかの時代。

どこかの世界。

ある世界に、ポケモンとともに暮らす世界があった。

彼らはポケモンとともにすごしていた。

そして、それに警鐘を鳴らしていた一派があった。

俗に『プラズマ団』と呼ばれ、その首領ゲーチス。

彼の野望を阻止するため、いく人かの『能力者』が立ち上がり、戦いを繰り広げた。

そして——それから、遠い年月が経った。

その年月は人を子供から大人へ成長させるのに等しく。

その年月は『勇者』に憧れた子供を成熟させるのに等しかった。

「セプタ！ 今日もやろうぜ！」

黒い髪の少年——傍にはフォッコがいる——が、セプタと呼んだ少年に訊ねる。

セプタは少し大柄な少年だった。ヤンチャムに似ていてやんちゃな性格らしいが、その柔らかな顔からはそうだととても想像つかない。

「……悪いな、イクス。今日はちよつと無理だ」

「えー！ なんでだよ？ だって、昨日は『明日も組手やろうなー！』って言ったじゃんか」

「悪い。けれど……」

セプタの背後にはひとりの老人が立っていた。そして、イクスはそれが誰だか解っていた。

「長老様……どうしてですか？」

「イクス、仕方ないことなのだ。我がアサメ村には……カミサマが宿らなくなるのじやよ。このままでは、村の民が皆死んでしまう」

長老はとても悲しげな表情で呟いた。

勇者という存在は、世界に安寧を導いたかのように思われた。

しかし、実際にはそれだけではなかった。

世界に安寧が齎されただけで、結局は元の為来りはそのままなのだ。マイナス成分が強かったのが、調和されただけで、元々の差分はそのまま残っている。つまりは、そういうことなのだ。

イクスたちが住むこの地方は、俗に『ポケモンが生まれた地』と呼ばれている。初めてポケモンが生まれた地であって、初めて人々とポケモンが心を交わした地であった。

ポケモンという存在の起源をたどることは、この世界ではタブーとされている。多く

の研究者がそれを研究し、そして発表した。いずれも話題集めのデータラメに過ぎず、結局は誰にも解くことのできない、カミサマの問題なのだ。結論づけている。

「……仕方がないのじゃ。イクス、これも世界の宿命。寧ろ『安定化装置』に認められたことこそが、素晴らしいと思うべきなのじゃよ」

『安定化装置』

この世界の中心にある、世界の安定を諮るシステムのことだ。それは組織であるし、システムであるし、個人である。しかしながら、その全容を知る人間は数少ない。それが出来たのはつい数年前のことである。今までは隠れていた存在だったのか、それとも本当に居なかった存在なのかは知らないが、大多数の人間がそれを知ることはない。そして、安定化装置に選ばれた人間こそは『聖堂騎士』として任命され、中央にある安定化装置を守るための防衛に就く。そして、いつからかそれは名誉になり、選ばれることが生きている意味に等しいとも考える人間も居るほどだ。

「なあ、イクス。俺は嬉しいんだぜ。これでも。なんてったって、『聖堂騎士』に選ばれるんだからな！」

セプタは笑って、腕を挙げた。ヤンチャムもそれを真似するようにポーズをとった。イクスはそれに返すように小さく笑った。

しかし、まだ彼らは知ることはなかった。これから始まる、大きな物語を――。

俺の同級生が魔王

プロローグ

まったく人生とは平凡なものだ。事件というものが起きたりもしない。宇宙人が襲来して、地球を大混乱させるとか、そんなことも起きてない。

——まあ、すなわちまったくふつうの日常生活を送っているわけであって。

そんなこんなで俺は学校に向かうために長ったらしい坂を登っているわけだが。暑い。暑すぎる。全くなんで俺はこの長い坂道を登らにやなんのだ。まあ実際は俺が偶然にもこの丘の上の高校を受験して受かってしまったことからだと思う。自業自得の行為、といってしまうえばそれまでなのだが。

「よう。なにしてんだ？」

ふと、俺の隣から声が聞こえてきた。俺は振り向いた。

そこにいたのはこの学校で出来た数少ない友人、大田だった。

「よう。なんだ？ どうした？」

「どうした？ と言いたいのは俺の方だ。お前最近疲れてるんじゃないのか？」

「ああ。俺は疲れてるのかもな」

俺はそう言いながらただうつむいた。

「なんだ？ お前やっぱおかしいぞ。俺くらいに言ってみろよ。俺にぶちまけられないでだれにぶちまけられるんだ？」

他にもぶちまけられる人間はいっぱいいると思うのだが。俺はそう思いながら、一緒に歩いた。

「じゃあさ、お前さ。俺の言葉、何言っても信じられる？」

「何言ってるんだ？ 俺はお前の親友だぜ？」

いや、俺親友になつた覚えはないんだけど。とか思いながら、まずはどこから話そうか、とか思っていた。

うん、そうだな。じゃあまずは入学式の時から話をしようか。

第一章

俺がその『おかしくなった』元凶に出会ったのは今から2ヶ月ほど前、入学式の時だったと思う。

俺は中学の時は陸上競技——といっても100メートル走だが——に精を出していたので俺はまっさきに陸上競技部を探した。

放課後になって、部室群から『陸上競技部』というプレートを探すのにはそう時間は掛からなかった。

結論から言おう。この学校に陸上競技部はなかった。

そもそも受験の時に、決めるときに、パンフレットをみておけばよかったのだ。やってしまった。もうどうしようもない。と、ふと空を見たそのときだ。

屋上に少女が立っていた。

なぜ少女と分かるかと言うと、その学校指定の青のセーラー服からである。なにしてんだろう。とかそんなことを考えていたよ。当時はね。

ところがさ、そいつ。何したと思う？

飛び降りたんだよ。思いつきジャンプして。

いやあ、思わず驚いて、それを捕まえようとしたね。運動方程式とか $E=ma$ とか当時は知らなかったけど、もし知ってたら、逃げてたのかもしれないね。

「危ない!!」

そんなことを叫びつつも、俺はその少女の下にたどり着いた。

あとは待ち構えるだけ。でさ、このあと、物理の授業で習ったんだけど、重力加速度って結構あるから仮に二、三秒だけにしろ、すごいスピードが出るんだよね。でもそんなこと知らなかったから突っ込んだね。物理法則のありがたみを知ったね。実験する必要ないよ。これは。ってね。

そのとき俺は比喩とかじゃなくて悪魔とか魔王とかが地の底からほえてるような声で、いや、ほんと比喩がうまくないな、俺は。ともかく、そんな声を叫びながら、少女の真下に立った。

あとは少女が落ちるのを待つだけさ。といつても、コンマ3秒位だよ。待つなんて意味ないのかもしれないけどね。

……人生って、ほんとに訳わからないよな。平凡で、ふつうで。なにが起きても、現実の範疇を越えないことばかり。

しかしだな。その日を境に変わった気がしたんだ。俺の生活か、または俺自身か。それはわからない。

ともかく、その空から落ちてきた女の子をゆっくりと拾い上げた。まさか、このあと謎の組織におそわれたり、空飛ぶ島とかに行かないよな、とか思いながら。

彼女は、目を覚ました。ゆっくりと、ね。

そしてみえてきたのは、黒と青が混ざったような鮮やかな色をした眼だったよ。まるで外国人じゃないかと思つた。でも顔立ちとかが純日本人っぽかったし、まあ、それはあり得ないな、とか思つた。

そんなことを考えているうちに彼女は俺に声をかけた。さあ、第一声はなんだ？　まさか「好きになりました」とか言い出さなかなー。いや、それなんてラブコメなんだよ？　とか勝手に思つていたら。

「あの」

彼女の声は自分が想像したとおりのすつきりとした高い声だった。あれ、もしかして俺の想像からの恍惚とした表情をみて、怪しがられた？　とか思つていたら。

「どけ！　私を誰だと思つている！」

思わず1 m以上離れてしまったね。いや、もしかしたらツンデレじゃね？　とかまだまだ見捨てられない——それくらい彼女はきれいだったのさ——そんな思いを抱いて彼女を眺めていた。

「……お主。我が何者か、わかるか？」

「え？」

「我は、この世界を統べるべくやってきた魔王！　お主、私の部下となれ！」
いやあ、もうびっくりしたね。もう戻れないと思つたよ。

「は？」

俺はただその声を聞いて、立ち尽くしていた。遠くの山から鳥の鳴き声が聞こえてくる程度である。

「……わからなかったようね！ もう一度だけ言うわ！ いいからさっさと私の部下に」「いやつまりどういうことなんだよ。おまえ厨二病でも発症してるのか？」

「その『ちゆうにびよう』とやらはわからぬが、わたしは本気だぞ？」

彼女は顔をずいっとこちらに向けてきて、ぶつかりそうな勢いで、というかぶつかっているんだけど、まあそんなことはさておき、言った。

「イエスカノーだ。簡単な選択だろう？」

「いや、よく訳わかんねえよ。魔王ってロールプレイングゲームとかに出てくるアレかよ？」

「ロールプレイングゲーム、とやらが何かはわからぬが、正真正銘魔王だ」

「じゃあ証拠を見せろよ。『魔王だ！』っていう証をさ」

「よかろう」

そういつて彼女はおもむろにセーラー服を脱ぎだした。

「qwse drft gyふじこーp……」

いや、もうその頃に俺は何を言ってるのかさっぱりだった。たぶん頭の回路がショートしてたんじゃないかな。何をしたかって？

彼女は地面にセーラー服を投げ捨て、下着姿になった。といってもピンクのシンプルなブラジャーだったためか、遠目でみていると裸に見える。

「な、なにを……」

俺がうろたえていると彼女はそれを恥ずかしがるよりは誇っているかのように胸を突き出して、

「みる。我の胸のところを」

「え？」

そういわれて俺はその少女の胸をみた。よくよく考えるとこうまじまじと女性の胸をみるなんて初めてだから興奮してはいるものの、俺は理性でそれを押しつぶす。

「ドクロのマークが見えるだろう？」

確かに、彼女の左の丘の3合目付近にドクロのマークが見える。「それが、魔王の証だ」

「これが？」

「ああ。そして」

彼女は不適に笑みをこぼし、

「これをみたものは魔王に忠誠を誓うことになる」

ここから、脱出してください。 エーテル・ラビリンズ編

プロローグ

ふと、気がつくと俺は白い世界に佇んでいた。

「……どういうことだ？」

俺の名前は呼子龍樹。しがない学生である。成績は……まあ聞かないでくれ。中の下
としか言えないことは事実だ。

まあ、そんなことは無視しておいて、何故俺がここにいるのか、俺自身が説明せねば
ならないだろう。と想いたいが、それもできない。何故なら俺だつてここに来た理由を
知らないからだ。そんなもの知ってる奴がいるならば、俺が聞きたいものだ。

「——連絡がごさいます」

そんな声が白い空間に響いたのは、俺がそれを知りたく、部屋を漁ろうとしたときだ
つた。まあ、部屋を漁ろうにも、白い壁しかなくそれを隠すやつもなさそうなので、諦
めようとしていたのだが。

「……ようこそ。エーテル・ラビリンズへ」

ブウン、とノイズとともに映し出されたのは、スーツを着た人間だった。ただし、顔
は覆面をかぶっており、見えなかった。

「えー、通信が見られる状況でしょうか？ 皆さん。はじめまして、私は『マスター』と申します。突然、みなさんをごの状況にさせてしまい申し訳ありません」

「なんだかそのマスターと呼ばれる人間は一応人性でもあるようだ。いや、待てよ。あるならこんなことしないか。」

「あなたたちは今、なぜ自分たちがこうなっているのだ！ と憤慨していることでしょう」

「おお、わかっているじゃないか。そうだよ、そのとおりだよ。」

「しかし、それでも私にはやり遂げたかったのです」

「何をだよ。小出しに言うな、と俺は一人でその画面に突っ込んでいた。だけど、そんな声が相手に聞こえるのか、と聞かれれば答えはノーだし、それは当たり前のことだ。」

「皆さんに課せられた任務はただ一つ。たった一つ。それだけをやってくれればあなたたちは解放されます」

「ほほう、そうきたか。分かったぞ。さあ、言ってみろ。」

「ここから、脱出してください」

「まんますぎるじゃねえか!!」

ちくしょう！　ここにあいつがいたらジャーマンスूपレックスでもかましているのに！　なぜここにいない！

——おっと、気を取り直して、今あいつはなんて言った？

「繰り返します。ここから、脱出していただければ私はもういいのです」

「何がいいんだ？　誰のため？　それは勿論あの『マスター』とやらのためだろう。しかし、なぜこれをする？　しかも、テレビをして大々的に行なったからには、他にも人間がいるのだろうし。」

「——では、幸運を祈ります」

その言葉と一緒にテレビの電源は落ち、後ろにある扉が重々しく開いてそこからクソツタレなほど生ぬるいどろどろの空気が送り込まれてきた。どうやらこの部屋は空調完備だったらしい。ちよっとしたホテルよりすげえじゃねえか。

そして、この巨大迷宮『エーテル・ラビリンス』を舞台としたデスゲームが開始されたのだった——。

第一層

扉をくぐってみたのだが、ついに訳の分からない状態になっていた。

まあ、簡単に言ってしまうえばそこは小さな街だった。上を見上げると、空がある。紛い物の空か、それとも本物の空なのかははつきりしない。それでも、そこには街があった。

そして、その街の中心には天を突き抜けるほどの巨大建造物が見えていた。

「……ここは、なんなんだよ……」

ふとまわりを見渡してみると俺以外にも人間がこのラビリンズとやらに迷い込んだらしく、人間がちらほらいたので、適当な人間に声をかけてみることにした。

「ちよつと、そののあんた、聞きたいことがあるんだけど？」

「あ、どうした？」

顎に無精髭を生やした気前のよさそうな男だ。顔は適度に優しさのオーラが滲み出るような肉の付きで、ああこんなヒトが実際に近くにいればよかったのになあ、とか思いつつ話を続けた。

「ここは一体どこなんだ？」

「そんなもん知らねえよ。俺も来たばっかなんだからよ。……と言いたいがあんたとは気が合いそうだな。俺が知ってるだけの情報を教えてやるよ」

初端から優しい人間にあえて、俺は嬉しい。嬉しんでいる。内心感謝しつつその男の話聞いた。

「ここは第一層『クラウド・ビギニング』らしいぜ。エーテル・ラビリンスの最初の層で、かつ最初の街さ。あそこにいるガイドのおねーちゃんが言うには、こう言うことらしいぜ」

エーテル・ラビリンスとは

全44層からなる石造りの塔であり、建造物内は迷路になっている。

なお、モンスターなどは出現しない。ただし、カラクリなどが無いことは否定できない。

そのため、第一層には街を用意した。場合によってはほかのところにも街が存在する。それを利用するがいい。

俺はその男から聞いたことを脳内で軽くまとめてみた。なるほど、まるでどっかのMMORPGみたいだ。それに、エーテルって一体何だ？

「なんでも、エーテルはいろいろ説というか、学問によって違うらしいな。例えば11世紀以降に学者とかキリスト教の牧師たちが確立したスコラ学ってのは天界を構成する

物質とでも言われてるらしいぜ」

「それじゃ、俺達は天界にいるってこと？」

「……科学じゃ『宇宙空間』や『世界の涯』とも言われてるそこにかね。なんともロマンのあることだ」

「ところで、俺達自己紹介をしていなかった気がするんだが」

「おお、そうだったな。俺は弥永大地だったんだ。お前は？」

「俺は、呼子龍樹」

「変わった名前だな。……ま、これからもよろしくな」

「ああ」

そうして、俺達は固い握手を交わした。

さあ、ところでどうしたものか。よく考えたらこのまま攻略しようとなれば男づくしのむさ苦しい話になってしまう。それってあんまり読者が望んでないバッドな感じになっちゃうんじゃないだろうか。やばいぞ！ 閲覧数減っちゃうぞ！

「……でよ、ちよっと思っただけこのパーティー、華がない気がするんだよな？」

大地、お前はエスパークか。そうなのか。なんでだったって、俺の考えていたことが理解できたんだ？

「そこにさ、ソロで行こうとする奴がいるんだよ。それも結構美人でさ。どうよ？ そいつと一緒にいかねえか？」

「でも本人がソロなんだろ？ 独りで行かせりゃいいじゃん」

「お前はほんとに分かってねえな、ココ」

「……ココ？」

「ココだよ。お前のあだ名、呼子だからココ。どうだ、いいだろ？」

とりあえず頷いておく。ココつてのは初めて呼ばれたあだ名だ。というか、あだ名すら付けられたこともない。即ちこれが俺のはじめてのあだ名つてわけだ。いいね、ココ。ここから脱出できたら流行らせておこうかな。

「……んで、そいつんとこ行ってみようぜ、ココ」

「ああ、そうだな」

とりあえずその美人（あくまでも大地がそういうだけなのだが）の場所へ向かってみることにした。まあ、どんな人間なんだろうな。

……性格が合えばいいのだが。

十一

「なによ！ いったいどうしたつてのよ！」

そいつがいると聞いたのは、小さい武器防具屋での出来事だ。ここではなんでも全てコンピューターで管理されているためか、もちろん店員もコンピューターのAIらしい。

いま、その人間はAI相手に喧嘩していた。持っている革靴からして、値段について争っているのだろうか？

「おいおい、一体どうしたってんだ？」

まずは店員に話してみる。なんというか、そこに映っているのは普通に可愛らしい女性なのだが、ホログラムだと聞くとなるほど、違和感を感じてしまうのはやはり人間の脳が不完全なのだろう。まあ、そんなことはさておき、一体なにがあったんだ。

「この人が革靴五十ゴールドはおかしいんじゃないの、と言いつつ出しまして……」

ははあ、五十ゴールドか。うむ、高すぎるようにも思えて、安すぎるようにも見える。なぜ彼女がこれで争っているのか、わかる気がする。なぜなら、はじめにここから脱出するために集められた人間は、あの白い部屋で幾らかの装備（といっても櫓の棒きれと、ちよつとしたスカーフくらいだ）とお金（ここ独自のものらしく、百ゴールドが存在していた）を手に入れて、以後それを用いる。迷宮の各層にもお金や装備は落ちていく——と、親切にも白い部屋にあった同人誌ばりのうすさの本に書かれてあった。

五十ゴールドとは最初に支給された百ゴールドの半分を意味している。つまりは、革靴のみで死線までの距離を半分まで縮めたに近い。この迷宮は『モンスターこそ出ない』とは書かれてあった。それはつまり、唯一であり最大の敵、空腹のみと純粹に戦えということを意味していた。

にしてもだ。

この女は無計画すぎる。

考えればわかるが、ロボット相手（正確にはコンピュータ、それもホログラム）に
対して値引きしろというのは通用するだろうか？ 答えはノーだ。はっきりとそう言え
る。

それをこの女はやつてのけている。なんというか……はつきりといえば、俺とは性格
が合わないと思う。

「……で、どうなのよ。この革靴！ 四十ゴールド！ 四十ゴールド！ 四十ゴールドが相場なんじゃな
いの?!」

「もう五十ゴールドで勘弁したらどうなんだ……」

「なによ、あんた」

うわっ、しまった。つい口に出してしまった。

「なによさつきからでしゃばって！ しかも挙句の果てに、あたしの邪魔するつての。
はあ、つまらない人間ね。ほんとに」

「なんなんだ、さつきからお前。ほんとうざいぞ」

「……革靴はいいわ。その代わり、こいつをいただいていく」

そして、そいつは革靴を置いて——あれ？ なんで俺の手を繋ぐんだ？ いや、ちょ
っと待って！ なんで強引に引っ張っていくの?! あと大地お前止める！ ニヤニヤ

してるんじゃないよ！　ちくしょう！　あんな老け顔で十八歳とか言ってたのは嘘だったのか？！

「……あああああああ」

情けないくらいの悲鳴をあげて、俺は街の外れにまで引きずられていった。

ポケモン十ノブナガの野望 ゲンムVSダイチ編

第四回

カズヒデとシノはハンベエたちと合流した。そして、今までにあったことについて話したところ、ハンベエの顔は少しだけ笑顔になった。

「……アヤゴゼンさまに会ったのか」

「そうだね、知っているのか？」

「知っているものなにも、彼女のクマシユンが放つ技は小さいながらも強力だ。侮ってはいけないと思うね。もし、戦うとするならば」

「あー……その話なんだけどさ」

カズヒデは頭を搔く。突然の反応にカズヒデ以外の全員が「？」を頭の上に浮かべた。

「どうせなら、直談判しちやおっかなと思つて。ほら、『いつでもいいですよ』的なこと言つてただらろ？」

「そうだけれどさ……」カズヒデの言葉に呆れつつ、始めに答えたのはシノだった。

「だからって、それがうまくいくとも限らないし、最悪メツタ打ちにされることもありえるよ？ いくらなんだつてイクサではかなわないと思うな」

「なんとかなるさ。そのときはその時だよ」

そう言つてカズヒデは笑つた。カズヒデが言ったことは少なくとも無理だ。成功させるのは不可能に近い。

けれども、その笑顔を見るとなぜか誰も否定できないのだった。

十一

その頃、ゲムムの城。

アヤゴゼンと、ひとりの男が会話をしていた。

「……姉上、どちらに行かれていたのですか。もしや城下に」

「城下には、違反したほにぎり屋がございましたよ。……まったく、管理が行き届いてるというのもこれでは嘘になってしまいますね」

「そういう問題ではないのですよ、姉上。わたしは」

「私ならば、問題はありません。仮にも私はブショーなのですよ」

アヤゴゼンの言葉に、男は返す言葉もなかった。

「そうですか……いや、けれども……」

「そうそう、そうでした。一つ報告があつたんです」

アヤゴゼンは思い出したかのように、手を叩いた。

「どうしたのです？」

「少し、面白そうなブショールに出会いましたね。えーと……名前は確か、なんと叫ぶかなあ。聞いてなかった気がするな。エーフィを従えていたのは覚えてるのだけれど」

「エーフィ？」

男はその単語に引っかけた。

そして、ひとつの結論を導き出した。

「姉上、もしや『カズヒデ』ではあるまいか？ エーフィを従えるブショールで、名が知れているのは彼しかいません」

「……有名なのですか？」

「風の便りではアオバとイズミのイクサをなだめたとも聞いています」

それを聞いて、アヤゴゼンは微笑んだ。

「ほほう……あの若いの、やるのね」

「しかし、我が国に来るとは、何か使命でもあるのだろうか……」

「おや、ケンシン、解らないのですか？ ブショールがすること、解りきったことでしょう。この世界のパワーバランスを変えてしまう……つまりは、リュウの国のノブナガをイクサで倒そうと、そう思っているではありませんか？」

「馬鹿な」

姉の言葉に、馬鹿らしい、と正直な感想を示したケンシン。

しかし、アヤゴゼンの顔は笑っていないかった。

「ケンシン、そんな風に行っていると……そなたの首も、獲られるかも怪しいぞ？」

「そんなことは断じて有り得ません」

「そうかね。有り得ないことは有り得ないと思うよ。努努気にしたほうがいいかと思
うけれどね」

そう言つてアヤゴゼンは部屋をあとにした。

誰もいない部屋で、ケンシンは呟く。

「——私がそんな若いブショウに負けることなど、断じて……。しかし、ブショウ……
カズヒデはなにをそんなに生き急いでいるんだ？ 分からぬ。まったくわからぬ……」

その呟きは、誰も聞き取れることはなかった。

【特別読み切り】オツキミリサイタル 【二次創作】

ちやうど私たちが歩いているところ、街の電気屋さんにあるテレビにクギ付けになっていた。理由は簡単で、最近コンサートをした流行のアイドル——まあ、私のことなんだけれど——が映っていた。アイドルがちやうどカメラのズームで決めポーズをしようにとしたときにスタッフが落としてしまったボールをヒールで踏んでしまわずっこけてしまった様子を見て、私は我慢しきれずため息をついてしまった。なんでこの時の残ってるんだろうなあ。

「もう、どうやったって無駄なのかなあ……」

私の隣にいたヒビヤくんが小さく呟く。そのヒビヤくんの顔はなんだか泣きそうだった。

「諦めちやダメだよ」

なんて言葉をかけようとしたけれど、そんな言葉じゃまったくもって多りそうになかった。

だったら、簡単なことかもしれない。

「そしたらもつと元気になるなくちや、明日も眩んじやうよ！」

私はそれを言う事しか出来なかった。

「あ、あの……おばさん？」

「だーからー、わたしはモモだって……どうしたの？」

ヒビヤくんの顔は私の笑顔とはうらはらに暗くなっていく。一体どうしたのだろう、と振り返ると――。

――如月モモちゃんですよね?! サインください!!

――モモちゃん hshs

……後ろにギャラリーが集まっているううう!! しかも、また hshs したやついるし!!
急いで逃げよう!! 逃げるしかない!!

「ヒビヤくん、逃げるよ!!」

「え」

ヒビヤくんの返答を待たずに私は強引に手を取り、駆け出していった。

ああ。結局、散々だなあ――。

十一

フードをかぶって、私はヒビヤくんを連れて街を歩く。ああ、なんだかお腹がすいちやっとなあ。

「ヒビヤくんお腹空かない？」

「え、僕はいいよ別に……」

「あ、こんなところにフアマミレスが！」

「僕の意見聞いた意味は?!」

中に入ってテーブル席に対面する形で座る。何も注文しないみたいだったので、私が注文する。

店員さんが来ると同時に、私は注文を始める。

「あ、すいません。えーとお子様ランチとお寿司セットとアラビータとアンチョビピザとミラノ風ドリアとコブサラダとチョコアイスクリームとバニラアイスクリームとカレーライスを一っ!」

「ちよ……そんなに食べるの?!」

「ヒビヤくんの分もだよー。あ、あとドリンクバー二つで!」

「ドリンクバーもかよっ?!」

かしこまりましたーと言って店員さんは戻っていった。

数分もしないうちに商品の全てがテーブルいっぱいになり並べられた。うーん、美味しそう……。けれど、ヒビヤくんはツツコミをするとき以外はうつむいていて、なんだかやっぱり心配になっちゃったのだった。

「なんでもいいよ、好きなの食べて!」

「まあ……とりあえずこれ……」

そう言ってヒビヤくんはカレーライスを取った。おお、やっぱりカレーだよね！
ヒビヤくんはカレーを頬張りながら、呟く。

「あのさ、おぼさん。僕のこと気にかけているなら別にいいけれど……僕は弱虫なんだよ。ダメなんだよ……彼女を、ヒヨリを取り戻すなんて、そんなの絶対にできやしないよ」

そう言ってヒビヤくんは俯いた。ヒビヤくんは行方不明になったヒヨリちゃんを探すために躍起になっている。ヒヨリちゃんはトラックに撥ねられたらいいのだけれど、すぐそこには忽然と居なくなっていた。団長さんは「俺たちにしか解決できない」だなんて言ってたけれど……本当なのかな？

「ねえ、ヒビヤくん。これ食べたらゲームコーナーいかない？ 私シューティングゲーム得意なんだよー！」

だから、私にはヒビヤくんを信じることしかできない。
君には——まっすぐ前を向いて欲しいんだ。

十一

カラオケに行ったり、ゲームコーナーに行ったり、メイド服を一緒に着たり……いろんなことをした。

けれど、それは全てヒビヤくんのためでもあった。だって、本当にダメな時は私が支えてあげる。

だから、いつそ……なんて言つて諦めちや絶対にダメなんだからね。

「ねえ、一緒に進もう？」

一緒に『独りぼっち』を壊すんだ――。

ふにゃあああああああああああ！

背後から突然の悲鳴がして振り返る！ なんとそこには猫さんが……！ あ、しつぽ踏んじやったんだごめん！ 猫踏んじやったをリアルで体験するなんて思わなかつたよ！

「ほんとうにごめんつてば〜！」

そんな私の猫をなだめる姿が、ヒビヤくんにはヒヨリちゃんに重なつて見えたみたい――そんなことをヒビヤくん本人から聞いたのは、それから大分あとの事なだけけれど。

「どうなっているんだか、僕にもまったく解らないんだよね」

ヒビヤくんの話を聞いていると、私にもそれはまったく解らなかつた。話を聞くだけでも効果があるつて団長さんが言つてたから実行しているだけなだけけれど、ほんとう

にうまくいくのかどうかは疑問だ。

ヒビヤくんはまた泣きそうな顔になっていた。ヒヨリちゃんがよっぽど大事だったんだ。解る。

けれど、ため息ばかりで目を瞑っていちや。

「思いも……昨日に消えちやうよ？」

呟くと、ヒビヤくんは小さく頷いた。

「さあ、後半戦だ！ 遊ぶぞ〜！」

「なんだ、おぼさんがあそびたいだけじゃん」

「ヒビヤくんだってそんなまんざらでもないくせに〜。メイド服のやつ、ヒヨリちゃんに会ったら見せてあげようかな〜！」

「ちよ、お、おい！ 待てよ！」

「追いかけてごら〜ん」

そんなことをいいながら、私たちはまた街へ駆け出していくのだった――。

「……疲れたね」

「うん」

空は夕暮れとなり、パンザマストが響いていた。公園ではブランコに乗って遊ぶ少女がいた。きっと、年的にはヒビヤくんと同じくらいだろう。それを見たヒビヤくん

は一瞬で小さく俯いた。まるでヒヨリちゃんをそこに見つけたような、そんな表情だった。

そして、ヒビヤくんの目から——大粒の涙がこぼれて、地面に消えた。

ヒビヤくんがいた世界は、酷く小さな世界だったに違いない。ヒヨリちゃんは、恐らく、そこに閉じ込められているのだらう。けれど、その世界——『怪物』は大きく牙を向いた。だから、彼らは今こんな苦痛を負っている。

「一緒にいたかったんだ……ただ、一緒にいたかっただけなのに……!!」

ヒビヤくんの目からは涙が止まらなかった。

そんな君の心には、小さな言葉じゃ届くことも全然ありえないのかもしれない。

けれど、私は——君の力になりたいんだ。

「助けていんだよ、叶えたいんだ……ねえ!」

その言葉は、私も気づかないうちに、口から溢れ出ていた。

夜になって、満月が空に浮かんでいた。

——やってみせる。私はそう呟いて、ヒビヤくんの手を取った。走って、公園の中央に向かう。私の能力、『目を奪う』能力。それを使って——人を集める。サラリーマン、OL、買い物帰りの主婦、誰だって構わない。

「おばさん、なにを……」

「私だって、これができるの。だから……不可能じゃないんだ。君が望めば……また会えるんだよ！」

私は、思い切り笑顔でヒビヤくんに言った。

「……おい、大丈夫か」

「あ、あれ……団長さん？」

私は団長さんの膝枕で目を覚ました。

「遅かったからエネがお前のケータイを逆探知したんだよ。……って、あれ？ シンタローはどこいったんだ？」

「お兄ちゃんはどうせ帰ったんじゃないんですか」

私は起き上がり、ヒビヤくんはどこに行ったのか、あたりを見渡す。

ヒビヤくんは案外近くにいた。

ヒビヤくんは大きく深呼吸して、遠くのお月様に、「やってやるさ！」と叫んでいた。

——少しかっこいいかな、まあ。

そう思って、私は小さく微笑むのだった。

おわり。

次号予告

「RISING mini」第四号
7月13日刊行予定！

【連載陣】

ロジカリスト(白)

ネクストワールド 名のなき世界3

俺の同級生が魔王

ここから、脱出してください。 エーテル・ラビリンス編

ポケモン+ノブナガの野望 ゲームVSダイチ編

黒板厨ゆうな☆マギカ…結

FORSE プログレッシブ 第二回

あとがき

第二号、無事刊行しました!! なんとか、という感じですが。新連載もスタート! 名のなき世界シリーズの最新作とオリジナルが二つ! 楽しんでいただけたでしょうか? この号より毎週土曜日に刊行とさせていただきます。楽しんでいただけるよう、毎号大ボリュームで頑張りますので、よろしくお願いします!!

それでは。

奥付

初版 2013年7月6日